

74

北里柴三郎が郷里熊本で再出発を誓った二つの書

誌上発表

松崎 範子

熊本大学医学部同窓会 熊杏会

北里柴三郎は嘉永5年(1852)12月20日に、当時の熊本藩領阿蘇郡小国郷で出生した世界的な細菌学者である(昭和6年没 1931)。その生涯は、就学期、内務省官僚として研究に専念した時期、細菌学者として広く社会活動をした時期に大別することができる。

就学期の北里は、幼少期から地元の教育者のもとで学び、明治2年(1869)に熊本藩の藩校時習館に入学した。医学については西洋式医学校である熊本医学校(通称;古城医学校)で、同4年からオランダ人医師マンズフェルトに師事して学んだ。同7年にドイツ医学を学ぶために東京医学校(現在の東京大学医学部)に入学して、同16年4月に内務省衛生局に就職すると、同18年11月にドイツ留学の辞令を受けてコッホに学び、世界的な細菌学者となった。同25年に帰国してからは伝染病研究所(伝研)を創立して伝染病研究に取り組み、衛生観念の普及に尽力した。大正3年(1914)11月に政府が伝研を東京大学の付属機関としたことで、北里は転機を迎えた。北里は伝研を辞職して、翌月に私立北里研究所を設立する。翌4年12月には北里研究所を開所して後進の育成につとめるとともに社会貢献に励んだ。北里研究所における活動は、細菌学者北里にとって人生の集大成であった。

北里には、その心意気を伝える二つの書がある。一つは七言絶句の漢詩(読み下し文)「奏功一世あに無事なからんや 奮闘由来、我期するところ 説うを休めよ、人間(=世間)窮達の事 苦心よく耐え、これ男兒」、及び訓言「終始一貫」である。二つの書の成立について判明したことを述べる。

七言絶句の漢詩は「北里研究所」設立後、間もなく作られたと伝えられ、その後も毎年、決意を新たにするために正月の書き始めとしたとされる。この書の成立時期について、郷里小国にその手がかりがあった。北里は伝研を辞職した翌4年6月に、30余年ぶりに小国に帰郷した。この時に幼馴染みの友人たちと再会を記念した寄せ書きが、小国町北里柴三郎記念館に残る。これには前記の漢詩と友人による漢詩・蘭の絵が記され、そして「大正四年初夏」の日付がある。そして北里は郷里小国で図書館の建設を決め、翌5年8月に「北里文庫」として完成させた。

いっぽう訓言「終始一貫」について、これまで2点が確認されていた。ただし1点目は、北里柴三郎家に伝わるもので、所謂下書きである。2点目は、北里は同6年に慶応義塾大学医学科を創設して初代学科長に就任すると、同11年に第一回卒業生を送り出した。この時に卒業生にむけて捧げたもので、対外的なものとしては唯一であった。ところが今回、郷里小国にもあることが判明した。所蔵していたのは、再会時に故人となっていた幼馴染み上野孝一氏の末子武夫氏の子孫である。武夫氏は同3年に長崎医学専門学校医学科を卒業した医師である。

また北里は、武夫氏の兄荒雄氏にも蘭の絵のある漆器3点を渡していた。これは平成28年の小国町大火災で焼失したが、受け継いだ子孫から同4年初夏の寄せ書きにある蘭の絵と漆器の絵は同じとの確認がとれた。荒雄氏は「北里文庫」の完成式典に参加して、北里とともに記念写真に写っているの、この時に「終始一貫」の書は若き医師武夫氏へ、荒雄氏には父孝一氏への友情の証として漆器を渡したものと考えられる。

以上のことから、北里柴三郎は大正4年6月と翌年8月の帰郷をきっかけに、七言絶句の漢詩と「終始一貫」の文言を座右の銘として用い始め、社会活動に取り組んでいることが判明した。